

# 新連載 美という名のエネルギー

vol.1

栗原直弘

(古美術商)

## 序にかえて

今回、この連載のお話をいただき、歴史ある「小さな蕾」の読者の皆様や関係各位の諸先輩方に、私の未熟な考察と拙文をお読みいただくのは、大いに腰の引ける思いがいたしました。しかしながら、この十年で美術品や古美術を取り巻く環境は大きく変化し、昨年のリーマン・ショック以降、その評価や価値までもが混迷を深める中で、私の拙い経験や知識でも、若い読者の皆様には何かしらのお役に立てるのではないかと考え、太田社長室長のご依頼をお受けすることにいたしました。今回ここで私がお話ししようとしているのは、取りも直さず「そもそも論」であり、諸先輩方には今更の事では「ございませうが、お暇つぶしにございただければ幸いです。」

## 第一章 エネルギーと波長 ①

### 人間の証明

美術品や古美術の世界には、或る日突然雷が落ちたように目覚めることがあります。また、誰かに手を引かれて足を踏み入れることや、文学や評論から興味を持つ場合もあるでしょう。いずれにせよ、私達は何かに導かれるようにこの世界の扉を開きました。

人類の発生とともに生まれ、その歴史と文化に育まれ、人間の意識に寄り添うように成長してきた「美」という存在、それを認識すること、生存本能だけで生きる動物には無い概念であり、それは人として生きる私達に与えられた特権

でもありません。言い換えれば、「美」を意識するということは、人間の証でもあるのです。

悲しいことに、今でも海外の多くの国では日々の糧にすら不自由し、「美」など愛でる余裕のない人達がいることも現実です。私は今生を人として生まれ、さまざまに「美」を鑑賞することができず、日本という平和な国に育ち、さらに「美」に関わる立場にあることに改めて感謝しています。

### 収集の切掛け

今このコラムをお読みの方の中には、私のように親代々美術品や古美術の売買を生業とし、品物に囲まれて育った方もおられるでしょう。もちろん、これは特殊なことで、むしろ一般的には美術品や古美術と「縁」があるという方が稀なことであり、多くの人はそれらを手にする機会も少ないでしょう。

「美」の世界ばかりではなく、人生における未知

の扉はそこここを開いています。読者の皆様はどのような経緯でこの世界に足を踏み入れ、それぞれのジャンルや収集品を選らばれたのか、是非一度、思い返していただきたいと希望いたします。

来し方を振り返るといことは、時を経て再読した書籍のように、現在の収集品に対する研鑽を深め、収集することの真の意義を確認し、改めて自らと向き合う切掛けとなるのではないのでしょうか。美術品や古美術は、物理的な価値ばかりではなく、それらを手にした時の自分自身を写す鏡でもあります。

### 走り出すような思い

人々の真摯な祈りが形を変えた仏教美術の厳しい造形、玉を模造することに始まり世界を変えた中国古陶磁の飽くなき探求心、地中で身を削るように光を増したローマングラスの儂い輝き、風雪

に耐えた人々と共に時を刻んだ古民具の無作為な佇まい、洋の東西を問わず美術品や古美術には数多くのジャンルがあり、人の思いの数だけ「美」は存在するのかもしれませんが。

そして、私達がそれぞれの「美」を見い出した意識、収集する目的もまた、人の数だけ存在するのでしょうか。しかし、そのような意識や目的以前に、多くの方が「知らず知らずのうちに、それぞれに魅了され、何かに突き動かされるように購入していた。」とおっしゃるのです。

では、「魅了された」とはどういうことか、何が「突き動かした」のか、それは理屈の及ばない世界であり、骨董屋の店先で何かを見つけ、居ても立ってもいられず走り出すような思いとは、いったい何処から来るのでしょうか。

### 集団ヒステリー？

ある学者の方に言わせれば、美術品や古美術を

含め、物事の「流行」や「収集」というものは、集合意識による幻想であり、ある種の「集団ヒステリー」であると言います。私は美術商の一人として、この意見には賛成できませんが、過去のさまざまな熱狂的ブームや、現在の美術品や古美術の価値や価格の混乱を見る限り、この考えにも一理はあるかもしれません。

美術品や古美術に限らず、何かに「心を奪われる」とはどういうことなのか、それは「好き嫌い」のレベルではなく、何かに「執し」「収集」するとはどういうことなのでしょう。

私は、人間が何かを認識し、それに対して何らかの感情を持つということを、「その対象や関連するエネルギーと感応すること。」だと考えており、次回から「すべての存在は固有のエネルギーを宿し、それらが発する波長との同調によって、さまざまな現象が起きる。」という持論に基づきこの論考を進めてまいります。(次号へ)